

論文の和文要旨

論文題目	現代日本語における「～がる」についての 統語的および意味的な観点からの考察 —第三者の感情に関わる種々の表現との比較において—
氏名	韓 金柱 (かん きんちゅう)

本研究は、現代日本語における形容詞（形容動詞も含む）および希望を表す「～たい」表現に接尾辞「がる」が接続した「～がる」という表現（例えば、「悔しがる」「食べたがる」など）について、統語的および意味的な観点からの考察を行い、第三者の感情に関わる他の種々の表現との比較を行うことを通じて、その本質を明らかにすることを目的とする。最後に、これらの考察結果をふまえ、日本語教育における「～がる」表現の指導についての提案を試みる。

「～がる」表現についての先行研究の記述には、いくつかの問題点が残されている。まず、接尾辞「がる」は、すべての感情・感覚形容詞に問題なく接続が可能なのではなく、また「がる」は属性形容詞に接続する場合もある。先行研究ではこのような点について指摘はされているものの、どの形容詞に「がる」が接続可能なかは網羅的には明らかにされておらず、また、「がる」が接続することができる形容詞にはどのような共通の特徴が見られるのかという点についても明らかにされていない。

次に、「～がる」表現自体にどのような統語的な特徴が見られるのかについても詳細な検討は行われておらず、「～がる」が実際にどのような形の変化を伴って用いることが可能なのかについては明確な記述が見られない。しかし、実例を見てみると、「がる」が属性形容詞に接続して用いられる場合は、使役表現（「*新しがらせる」）の形で用いられる例は見られず、また、どの形容詞に接続した場合も可能表現の形で用いられる例は少なく、特に感覚形容詞の場合には可能表現（「*冷たがれる」）の形で用いられる例は見られなかった。このような言語事実をおさえた上で、「～がる」自体の統語的な特徴について明らかにする余地が残されていると思われる。

また、先行研究では、感情形容詞および希望を表す「～たい」表現は、主語となるものが第三人称の場合はそのままの形では用いることができず、接尾辞「がる」をつけた形であれば用いることができるという記述がなされている。しかし、「私は悔しい」と「彼は悔

しがっている」との違いは、決して主語となるものの人称が異なるだけの問題ではない。「私は悔しい」は話者自身（「私」）の感情を表出する表現であり、主語に当たる「私」は当然「悔しい」という感情を内面に持っていると考えられるのに対し、「彼は悔しがっている」は主語に当たる人物（「彼」）が「悔しい」という感情を内面に持っていることを前提とする表現ではない。先行研究では、この点が明確におさえられていないため、日本語教育関連の教科書や指導書を見ても、「～がる」については、「私は悔しい」と「彼は悔しがっている」という表現を単純に主語の違いとして対比させて示すなど、適切でない取り扱いがなされている場合が見られる。

実際に「～がる」には、「彼女は顔には出さなかったが、心の中では悔しがっていた」、「彼女は表面上は悔しがったが、心の中では喜んでいた」のように、対象となる人物の外に表れている態度・言動と、その人物の内面の感情との間に食い違いのある用法も観察される。このような用法は、先行研究において見られるように、「～がる」表現が、主語に当たる人物の内面の感情が外的な態度・言動として外に表されていることについて述べるものとする記述では、十分に統一的な形でとらえることができない。さらに、「～がる」表現がどのような意味的な文脈において用いられるのかについても詳細に検討した先行研究は見られず、話者が、実際にどのような場面・文脈において「～がる」表現を用い、どのように事態を描写するのかという点についても、明らかにする必要がある。

また、第三者を主語としてその感情について言及する場合には、「～がる」表現のみが用いられるわけではなく、感情形容詞に対応する動詞（「懐かしい」に対して「懐かしむ」など）を用いて述べることも可能である。さらに、感情形容詞に「そうだ」が接続した「A そうだ」（「懐かしそうだ」など、ここで「A」は感情形容詞を指す）、感情形容詞に「ようだ」が接続した「A ようだ」（「懐かしいようだ」）、感情形容詞に「らしい」が接続した「A らしい」（「懐かしいらしい」）を用いることも可能である。「～がる」表現とこれらの表現とは何が異なるのか、その違いについては先行研究ではまだ明確な記述がなされていない。

このように、現代日本語における接尾辞「がる」をめぐるのは、統語的および意味的観点から見て、明らかにすべき問題点が多く残されていることがわかる。

本論文は、大きく第一部と第二部から構成される。

第一部では、現代日本語における「～がる」表現について、統語的および意味的な観点からの考察を行った。

まず、第1章では、形容詞と「がる」との接続、および接尾辞「がる」の意味・用法に関する先行研究の検討を行い、上記で示したような問題点を整理した。

第2章では、「～がる」表現の意味・用法についての考察を行うにあたり、まず、どの形容詞に「がる」が接続可能なのかについて網羅的に検討し、また接尾辞「がる」が接続することができる形容詞にはどのような共通の特徴があるのかについて見た。その結果、接尾辞「がる」が接続することができる形容詞には、感情・感覚形容詞および属性形容詞のいずれについても、人がある事物（物や事柄）に接した際に生じる感情・感覚を表すこと

ができるという共通の特徴があることがわかった。「がる」が接続することのできる属性形容詞は限られているが、それらの属性形容詞は単に人や物の性質・属性を表すのではない。例えば「新しがる」という表現が、「彼女はその帽子のデザインを新しがっていた」のような例で用いられる際、そこには、人が対象となる物（「帽子」）に接した際に生じる、ある心理的感覚（そのデザインを新奇なものと感じること）を表すという特徴が見られる。

第3章では、接尾辞「がる」の意味について、対象となる人物の内面の感情・感覚とその外的な態度・言動に食い違いのある場合も含め、統一的な記述を行うことを念頭におきつつ考察した。ここでは、記述のための道具立てとして、対象となる人物の「外的な様子」（対象となる人物が発した言葉、示した動作・動き、表情・態度など）、その「内面」（対象となる人物の内的な心理状態）、および「総合的な知識」（一般に人がある感情・感覚を抱いている際に発する言葉や、そのような際に一般に示す動作・動き、表情・態度などについての知識、および話者の頭の中に蓄積されている対象となる人物に関する知識）という3つの観点を立て、分析を行った。

この3つの観点を立てることによって、接尾辞「がる」の意味は、「話者が、対象となる人物が示している外的な様子を、総合的な知識に基づいてその人物の内面と関係付けてとらえ、それが対象となる人物の内面の表れであると描写する」ものであると記述することができる。そして「XがAがる」という表現について、観察され得る以下のような3つの異なる用法を矛盾なくとらえることが可能となる。

観察される第1の用法は、話者が、対象となる人物Xが示している外的な様子を、総合的な知識に基づいてその人物の内面と関係付け、それが、対象となる人物の「Aである」という内面の表れであると描写するものである。これは、例えば「彼女は机を叩いて、悔しがった」のような場合のものであり、「～がる」の最も基本的な用法である。

第2の用法は、話者が、対象となる人物Xについて、その「内面」に隠されたもう一人の人物X'を見ており、そのX'の示している外的な様子を、総合的な知識に基づいて対象となる人物Xの内面と関係付け、やはりXの「Aである」という内面がそこに表れているととらえるものである。これは、例えば「彼女は顔には出さなかったが、心の中では悔しがっていた」のような場合であり、対象となる人物が外に示している外的な態度・言動とその内面とに食い違いが見られる場合の1つである。

第3の用法は、話者が、対象となる人物Xが示している外的な様子を、総合的な知識に基づいてその人物の内面と関係付け、それが、対象となる人物の「Aであるふりをしよう」あるいは「Aである様子を見せておこう」という目論見の表れであると描写するものである。これは、例えば「彼女は表面上は悔しがったが、心の中では喜んでいた」のような場合であり、対象となる人物が外に示している外的な態度・言動とその内面とに食い違いが見られる場合のさらにもう1つの用法である。

以上の考察から、先行研究の問題点として指摘したように、「彼は悔しがっている」という「～がる」表現は、「私は悔しい」という表現と、決して主語の人称が異なるだけの対等な表現ではないという点について明らかとなる。「彼は悔しがっている」という「～がる」

は、あくまでも話者が、対象となる人物が示している「外的な様子」をとらえて描写するものであり、必ずしもその人物が本当に「悔しい」という感情を内面に持っていることを前提とする表現ではない。したがって、話者自身の感情を表出する「私は悔しい」のような表現とは、主語の人称の違いとして同等の関係ではとらえられないことがわかる。

また、第3章では、実際にどのような意味的な文脈において「～がる」が用いられるのかについて、収集した約6,300例の実例に基づき考察した。その結果、「～がる」は、対象となる人物が、普通とは違う外的な様子を見せているか、またはある特定の外的な様子を繰り返し示しているという特徴的な文脈において用いられることが観察された。

「～がる」の意味・用法、そしてそこに観察される上記のような特徴的な意味的文脈は、次の第4章における「～がる」が実際にどのような統語的な文脈において用いられるのかという点についての考察結果と、以下のように連関する。

まず、「～がる」は対象となる人物の動作・動き、表情・態度などを表す表現を付帯状況として伴う文、また対象となる人物が発した言葉を引用表現として伴う文で特徴的に用いられることが観察される。これは、「～がる」が、話者が、対象となる人物の外的な様子について述べるものであるという点と一致する。次に、頻度が大きいことを表す副詞的表現が共起する文で用いられることも観察された。これは、「～がる」が、対象となる人物がある特定の外的な様子を「繰り返し」示しているという意味的な文脈で用いられるという特徴と一致する。また、原因を表す表現、条件を表す表現、逆接を表す表現を伴う文、また程度が高いことを表す副詞的表現や、頻度が小さいことを表す副詞的表現が共起する文でも用いられ、さらに、対象となる人物の「今」の外的な様子をその人物の「以前」と対比する文で用いられることが観察された。これらは、「～がる」が、対象となる人物が「普通」とは違うある特定の外的な様子を見せているという意味的な文脈で用いられることと一致するものである。

第二部では、以上のような「～がる」についての考察結果に基づき、「～がる」表現と、第三者の感情について言及する際に用いられる種々の表現（感情形容詞に対応する動詞、「Aそうだ」、「Aようだ」、「Aらしい」）との比較を行った。その考察の結果は、以下のようになまとめられる。

まず、「～がる」表現は、これらの表現のいずれとも異なり、対象となる人物が、何らかの言葉や動作・動き、表情・態度などを「外的な様子」として外に示していない場合には、用いることはできない。これは、「～がる」表現が、あくまで対象となる人物が示したある特徴的な「外的な様子」をとらえて描写するものだからである。

個々の表現との違いについて見てみると、まず、「～がる」表現は、感情形容詞に対応する動詞とは異なり、対象となる人物が心の中に当該の感情を実際に抱いていない（例えば「彼女は表面上は悔しがったが、心の中では喜んでいた」）ような場合にも、用いることができる。それは、感情形容詞に対応する動詞が、あくまでも主体が「当該の感情を抱く」ことを表すものであるのに対して、「～がる」は、話者が、対象となる人物が示している「外的な様子」について、その人物の内面と関係付けてとらえて述べるものであり、必ず

しもその人物が「内面」に当該の感情を持っていることを前提とする表現ではないからである。

次に、「Aそうだ」は「Aがっている」と異なり、対象となる人物が、人がそのような感情を抱いている際に一般に示すような様子を外的には何も示していない（例えば「彼女は顔には出さなかったが、心の中では悔しがっていた」）ような場合には、用いることができない。それは、「Aがっている」が、対象となる人物が外に示している外的な様子とその人物の内面に食い違いがある場合にも用いることができるのに対して、「Aそうだ」は、あくまで対象となる人物の外見が今日の前でどのように見えるのかについて述べるものであり、対象となる人物の内面がどのようなものであるかについて踏み込んで述べるものではないからである。

また、「Aらしい」は「Aがっている」と異なり、対象となる人物が、一般に人が当該の形容詞で表される感情・感覚を持っている際に見せるような、何らかの外的な様子を示してはいるものの、それは表面だけで、実はその感情・感覚を内面に持っていない（例えば「彼女は表面上は悔しがっていたが、心の中では喜んでいた」）ような場合には、用いることができない。それは、「Aがっている」は、対象となる人物が内面にその感情・感覚を持っていない場合にも、その「ふりをしよう」あるいはそのような「様子を見せておこう」という内面と関係付けて、その外的な様子について述べることができるのに対し、「Aらしい」は、あくまでも対象となる人物の「内面」について、それがどうであるのかを推し量って述べるものであるからである。

また、「Aようだ」は、「Aがっている」と違って、対象となる人物が何らかの様子を外的に示していない場合にも問題なく用いることができる。それは、「Aがっている」は、対象となる人物が示している「外的な様子」について描写するものであるのに対し、「Aようだ」は、話者が、対象となる人物の「身体感覚・心理状態」をどのようにとらえることができるのかについて述べるものであり、その人物が何らかの言葉や動作・動き、表情・態度などを「外的な様子」として外に示しているのか否かを問題とするものではないからである。

最後に、日本語教育において、「～がる」を指導する際には、本研究における考察結果に基づき、例えば「私は悔しい」と「彼は悔しがっている」とを単純に主語の違いとして対比させて示すのではなく、「～がる」は、「対象となる人物が示している外的な様子について、その人物の内面と関係付けて描写する」ものであるということを明確に示すことが必要であると考えられる。そのために、「～がる」が用いられる特徴的な意味的および統語的文脈を的確に生かした場面・文脈を設定し、導入することを提案する。